

氏名(本籍) 小<sup>お</sup>川<sup>がわ</sup>栄<sup>えい</sup>一<sup>いち</sup>(埼玉県)  
 学位の種類 博士(言語学)  
 学位記番号 博乙第2232号  
 学位授与年月日 平成18年9月30日  
 学位授与の要件 学位規則第4条第2項該当  
 審査研究科 人文社会科学研究科  
 学位論文題目 延慶本平家物語の日本語史的研究

主査	筑波大学教授	博士(言語学)	坪井美樹
副査	筑波大学教授		名波弘彰
副査	筑波大学教授	博士(文学)	湯沢質幸
副査	筑波大学助教授		大倉浩
副査	筑波大学助教授		矢澤真人

## 論文の内容の要旨

本論文は、『平家物語』諸本中で日本語史料として最も価値の高い延慶本平家物語について、「和漢融合」の観点に基づいて、その文章・語彙・表記などのシステムを総合的に考究したものである。

本論文の構成は以下のとおりである。

- 第1部 延慶本の日本語史的意義
  - 第1章 延慶本の書誌・成立
  - 第2章 日本語史料としての延慶本
  - 第3章 江戸期書写の三本について
  - 第4章 延慶本テキストとデータベースの作成
  - 第5章 延慶本の言語年代に関する研究1
  - 第6章 延慶本の言語年代に関する研究2
- 第2部 延慶本における和漢融合
  - 第1章 機能進化としての日本語史
  - 第2章 表現システムの融合
  - 第3章 延慶本の文章構造
  - 第4章 文字表記の交用と機能的効率化
- 第3部 延慶本の語彙システムと和漢融合
  - 第1章 延慶本における語彙システムの進化
  - 第2章 副詞語彙システムの進化
  - 第3章 程度量副詞のシステム1 - 僅少を表す副詞
  - 第4章 程度量副詞のシステム2 - 甚大を表す副詞
  - 第5章 時制副詞のシステム
  - 第6章 時間副詞のシステム1 - 瞬時を表す副詞

第7章	時間副詞のシステム2 - 若干の間隔のある時間を表す副詞
第4部	和漢融合の背景にあるコミュニケーション
第1章	口頭語における和漢融合
第2章	敬語行動と敬語表現体系
第3章	和漢融合の背景にあるコミュニケーション

第1部では、延慶本平家物語の書誌・成立について従来の説をまとめ、延慶本の日本語史料としての特徴について論じた後、コンピュータを活用した研究方法として延慶本語彙データベースの作成についてその意義と方法を述べる。その上で、延慶本の成立について、他の同時期の史料と言語面から比較検討し、その結果、延慶本全体としては鎌倉時代後半の成立であり、冒頭部分の振り仮名など応永年間書写の段階で付け加えられた箇所が存在することを新たな「言語年代」考究の方法により実証している。

第2部では、機能進化の観点に立った日本語史研究の可能性について論じた後、表現システムの融合（和漢融合）として延慶本の文章・文体について考察を加える。その結果、延慶本の文体構造に「記録」的性格と「物語」的性格とがあり、「記録」に「物語」が付加される構造になっているとし、このような明確な構造性を有していることが延慶本における「文体の生産性」を高めていると考える。延慶本の「漢字仮名交じり」という表記システムにおいても、仮名の大小によって境界標示機能が働いている点などに漢文訓読文と仮名和文の表記システムの融合が見られると主張している。

第3部では、まず延慶本と『源氏物語』との自立語語彙数を比較し、両者の間に、延べ語数では大差がないにもかかわらず、異なり語数では延慶本の方が約2倍の多数にのぼることを指摘する。そして、この差異存在の理由は、延慶本における漢語語彙の多用によることを明らかにする。このことは、延慶本の和漢融合文体が漢語の使用に制限がなく、漢語語彙の表現性を自由に利用できる文体であることを意味するとし、この見通しのもとに延慶本の種々の副詞語彙における類義語の分布を精査する。その結果、和文体起源の副詞と、漢語・訓読語起源の副詞が機能的な分担をもって使用されており、和漢融合による機能的な進化が副詞語彙のシステムにおいても成り立っていると論じる。

第4部では、最初に延慶本には記録語交じりの会話表現が多数あることを指摘し、このことから、和漢融合が文章（書記言語）の上だけでなく、日常の口頭語においても起きていたことを意味すると主張する。このような事実と第2部・第3部で得られた知見をまとめ、本論文の結論にあたる見解を提示する。

即ち、延慶本平家物語の文体である和漢融合文体とは、記録体・訓読文体が「書く共通語」となって、口頭語との開きが大きくなるにしたがって、この間隙を埋めるものとして、和文体と訓読文体との融合による日本語表現システムの機能的進化として成立したものであると論じている。

## 審査の結果の要旨

本論文が研究対象としている延慶本平家物語は、従来から重要な日本語史料として認められており、その文体は「和漢混交文体」と呼ばれてきた。本論文は、あらためてこの延慶本平家物語の史料性を新しい観点と方法で問い直し、日本語表現システムの進化としての「和漢融合」が実現された文献資料であるとし、日本語の歴史の中に再度正しく位置づけ直したものであり、新見に富んだ優れた研究である。

本論文の著者は、「言語体系の変化とは、人間のコミュニケーション活動を背景とした機能的な進化である」という日本語史観に立っており、本論文の各部の論述は一貫してこの立場から観察され、また、その観察と考察の結果もこの著者の立場を実証するものとなっており、全体としてまとまりのある明晰な論考となっている。

本論文が示した独創性は、著者が提出する幾つかの新しい概念に端的に現れている。即ち、本論文では、「言

語」を基本的に「システム」と捉える。本論文の著者が言う「言語システム」とは、人間がコミュニケーションをする際に、言語音声あるいは文字表記と伝達内容とを相互に変換する規則の統合体である。このように考えると、従来「和漢混交文体」と呼ばれてきた類型的文体規定は、著者にとって極めて不十分であり、「表現システム」同士の融合即ち「和漢融合」という概念によってダイナミックな「機能進化」として捉えなおされることになるのである。

このような独自の観点から観察される結果、仮名の大小の書き分けによって一種の句読機能が表記上実現されていることや、多様な副詞の機能分担の実態など、従来見逃されてきた事実も本論文によって明らかにされている。また、個々の言語事実だけでなく、延慶本平家物語に現れる日本語が、日本語の歴史の中で新たに明確に位置付けられ、その歴史的意義が記述されたことは日本語史研究全体を裨益する成果であると言える。

以上のように本論文は独創的かつ一貫性のある考え方に貫かれた優れた研究である。今後の課題としては、なお、本論文で具体的に取り上げられなかった個々の言語事象についても、本論文のような立場、即ち「システムの融合による進化」として位置づけることが可能かどうか検証を続けることである。本論文は、客観的な言語事実を予見を交えずに記述するという立場からの研究ではなく、言語変化を「進化」として見るという或る意味「偏った」観点から事実を迫ろうとした研究である。そのために、独創的な発見や提言に富むとともに、部分的にやや強引な結論づけやデータ解釈が見られる場合もある。このような「偏り」をどのように修正し、より有効な言語変化理論として完成させていくかが今後の課題として残るであろう。しかし、このような問題の最終的な解答は、本論文の著者の今後の研究に期待すべきものであり、延慶本平家物語における和漢融合の解析として本論文の挙げた成果は学位論文として十分な水準に達しているものと判断される。

よって、著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。